

# 徳次郎石研究の立つ位置と考察

中川 博夫 (元宇都宮市立富屋公民館)

## 1. はじめに (徳次郎石研究の始まり)

「徳次郎石」は、旧日光街道西側の徳次郎山中から採石される凝灰岩であり、近接の類似の地の石文化に比して、独自性がみられ細工技術や石屋根に優れたものが特徴的で、VOL 1の本誌で述べたとおりである。これらと、『野州石造文化』・『日本遺産の大谷石文化』とはどのような関係にあるのであろうか、これらを明らかにする必要がある。あわせて、今後の研究の基本とする所をおさえておきたい。

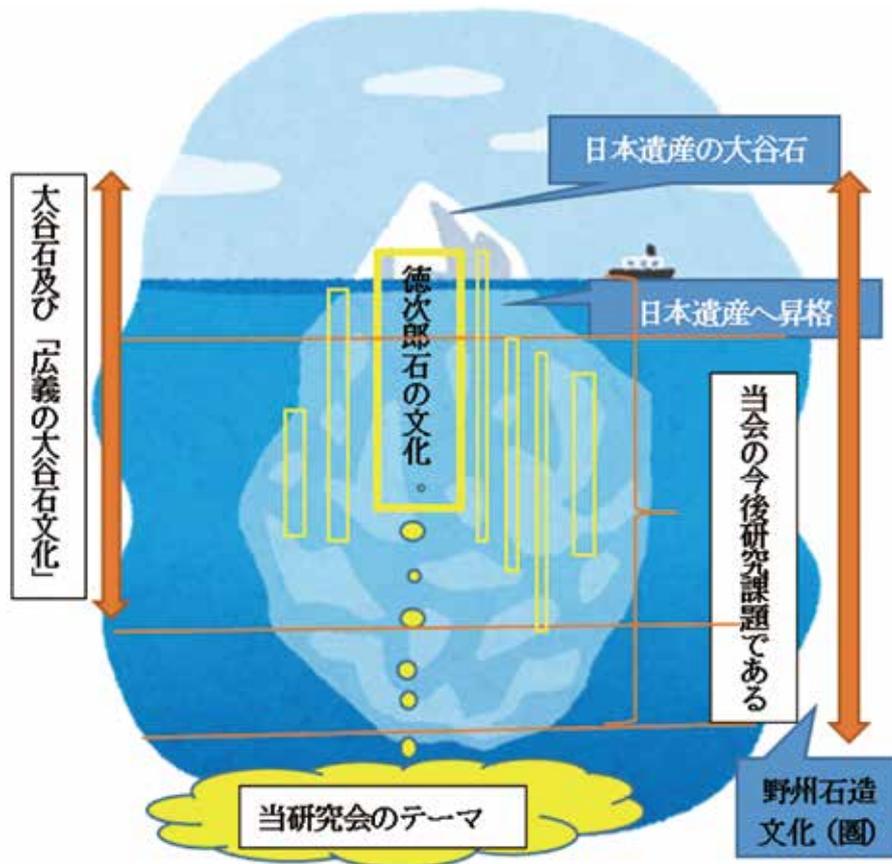


図1. 研究テーマと大谷石日本遺産・各石の産地の相関関係【氷山に例えると】

図1を見ていただきたい。当研究会のテーマが何であるかを、改めて問い直したい。それは、日本遺産の大谷石文化、すなわち38の構成物件では十分語られない、長らく集落の民の生活とともにあった石文化が、何であるかを明らかにしなければならない。いわば、日本遺産は氷山の一角として花開いたものであり、その水面下に、根源的にあった石文化が、あればこそ成立するものである。表現は不適切ながらも、これらは表裏一体をなしている関係とでも観念づけることができるのである。しかして、この大谷石の『日本遺産』と当研究会のテーマとの双方によって、初めて、広義の大谷石文化の全体像にせまり、風土とともにあった、野州全体の生活文化にまで及んでいくことになるのである。多くは、民の生活文化として溶けこんだ感がし、今日的にはすべから民芸的に美しいものとして、村落の片隅で置き忘れられ様としている。

これらの生活文化は、自然科学的には、地質・岩質・組成学的な特性を利用した、集落の民の努力と英知の賜物によるものである。同時に、凝灰岩誕生の地球からの贈り物の神秘を、解き明かさす必要がある。

これらからは、地層の連続性が野州全体に及ぶのは必至で、文化的にも相関関係にあると見られる。翻って、時代を遡っても、日本全土の各石産地相互に関連性が見られ、多少のタイムラグがあるものの、それぞれの地の知

見は相互に伝播され、各地の石組成にあった伝統文化に融合して、地域文化として開花したのが、日本の石文化の特徴であると考えられる。しかしながら、こうして、これらの根源的で、民とともにあった、多くの集落の石文化と科学が何ら記録を残すまでもなく終焉を迎えようとしているのが現実である。少しでも記録し、将来につなげたいのが、本研究会の目的とする所である。

以下、それぞれの概念を説明する。

●『日本遺産の大谷石文化』

平成30年（2018）大谷石文化が日本遺産に認定された。これには38件構成物件がある。

●『大谷石、狭義の大谷石、厳密な意味の大谷石』

大谷地区で採石される、凝灰岩でいわゆる『大谷石』をいう。

時代をさかのぼれば、この大谷石も採石地の集落ごとに、石名が細分化していたと考えられる。しかし、現時点で明らかでない。大谷石に関する、地質・地層等の研究は宇都宮大学により、成果を見ることが出来る。

●『広義の大谷石文化』

大谷を中心とした地域の、凝灰岩の文化を総称をいう。深岩石、桜田石、徳次郎石、長岡石など図2のすべてと、野州石造化圏の凝灰岩を含む。今日では、一般的に広くこの概念で『大谷石』と呼ばれるようになってきている。しかし、石組成・文化の違いを論じる場合、厳格な（狭義）の概念で、各石産地毎の名称により分類する必要がある。また、これら相互の岩質的關係は、必ずしも明らかでない。

●『野州石造文化（巻）』

栃木県の石造文化のすべてを包含する。鉱業は含まれず、凝灰岩であるかは問わない。

●『日本遺産への昇格』

本研究会などの活動の目指すものの一つで、新たに日本遺産に昇格の可能性の高い、広義の大谷石文化の物件等をいう。

## 2. 急務となった文化の野州石造文化圏の調査

隣接する、国本・豊郷地区においても、凝灰岩の採石が行われ、それぞれ産出量の多さは徳次郎石の採石場をはるかにしのぐ程である。又、歴史的文化的の違いが浮き彫りになってきた。江戸時代、徳次郎は日光街道の宿場と関連し、国本は、宇都宮藩との関連性がうかがえる。戸祭石は、豊郷界隈の採石では最も古く、古墳時代にさかのぼる。時代をさかのぼる程これらの地は、自治は歴史的経過による村落形態で、岩質の特徴により、石文化の特性が顕著に異なる。この宇都宮市内の各採石地も、現在、ほとんどがその垣根掘りなどの遺構を残すことなく、開発により破壊され、あるいは草木深く自然に黙しつつある。

長岡石で訪れた、幸いにも最後に残る長岡石の自ら生き証人と称する、石渡重男氏ですら、高齢である故自分がいなくなればもはや正確な長岡石の伝承なくなることを、非常に危惧されている。このような方が、他の地域にもいらっしゃるのではなかろうか。

調査は、確かに時既に遅しの感は拭えないが、さらに今後の時の経過により、採石の事実すら忘れ去られる。仮に不十分でも、今以上の機会を将来訪れないと思える。当研究会として、可能な限りの調査を行い、後世のため

に記録を残す活動を、いまずぐ起こさなければならない必要性を痛感する。その範囲は、大谷石と相関性がある野州石造文化圏（栃木県）全体に及ぼしたい。

先日、伊地半島地方の石産地を視察した。凝灰岩と安山岩の、採石の異なる2つの文化があり、大谷石の採石についても、歴史的に以前からも良く知られている様だ。県など行政機関が主体で、かなりの調査がなされている。伊豆市社会教育課の提供で、丁場（採石場）のかなりの資料を送っていただいた。（『伊豆半島の石場遺跡』）このような、綿密なマップを、野州全体に広げ残したい。（参考「大谷石百選」P112）これには、各地の郷土史家の方々の協力が不可欠であり、野州石造文化の掘り起こしのネットワークの構築を呼び掛け、行政関係機関にも協力をお願いしたい。

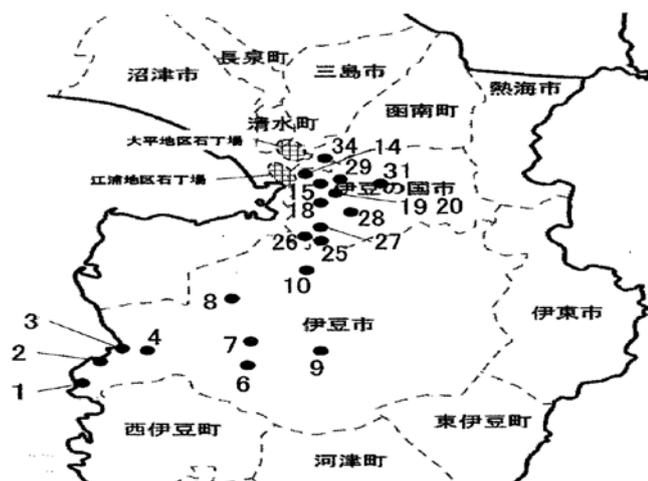


図2. 伊豆半島は綿密な調査がなされている 野州石造文化圏も同様の調査が必要と考える

提供：伊豆市教育委員会

### 3. 宇都宮における採石場と、石の呼称

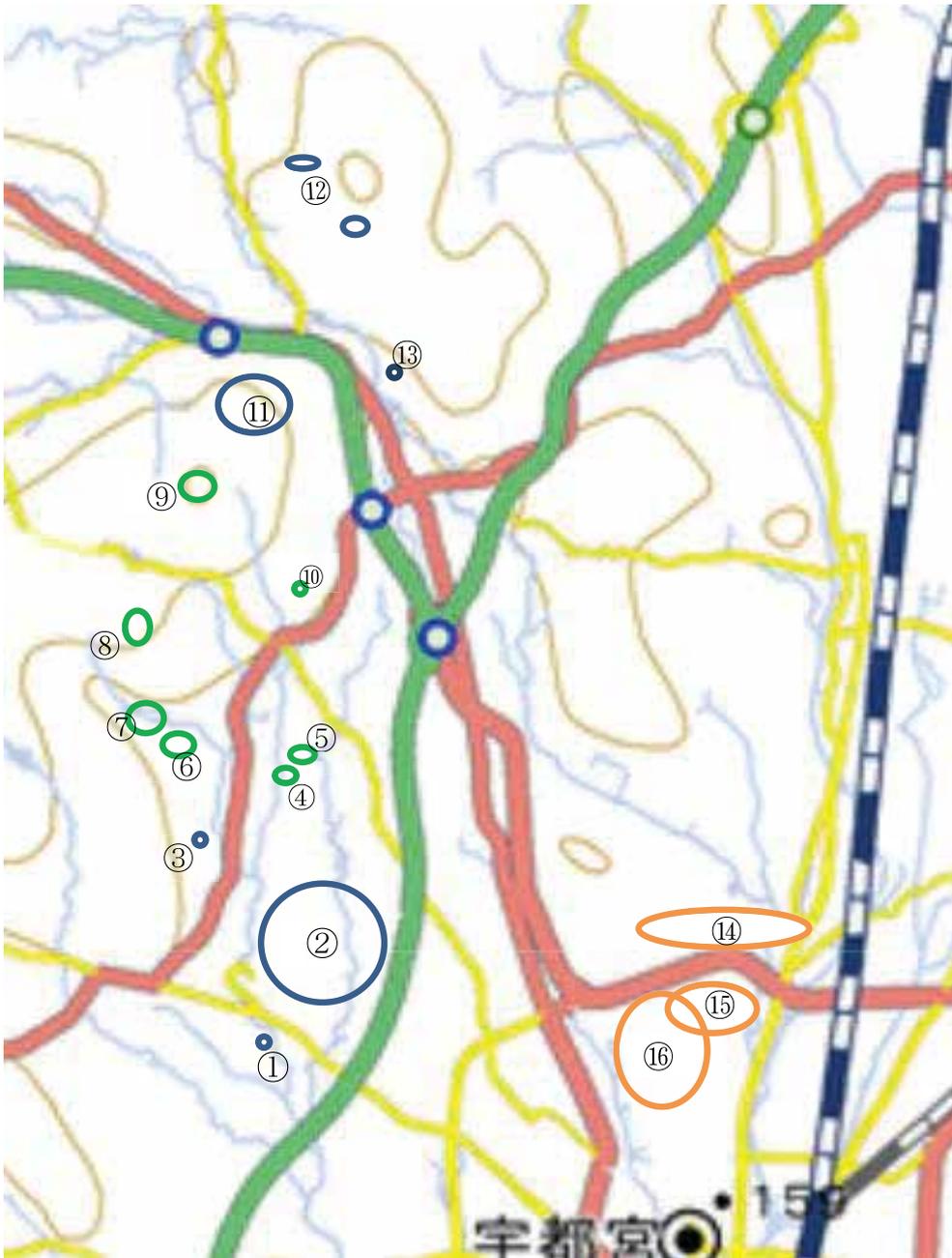


図3. 宇都宮の採石地と呼称のイメージ地図

#### 【大谷地区】

①戸室石（現在、大谷石の細目として出荷されている） ②大谷石（時代を遡れば、採石の集落ごとの石の名があったと考えられる） ③田下石（若草石）

#### 【国本地区】

④岩原石 ⑤岩本石 ⑥桜田石 ⑦中野石・⑧雨乞山石 ⑨寺沢石（寺沢石・天王寺石・新里石） ⑩熊堂石（くまんど石・山王石？）

#### 【富屋地区】

⑪徳次郎石（日光石 日光石材㈱の自社ブランドによる石名） ⑫大綱石（赤石・桜石） ⑬下横倉石（岩井堂石）

#### 【豊郷地区】

⑭長岡石・⑮山本石・⑯戸祭石（総称して長岡石との傾向がみられる）。

※以上、表記されている石の呼称は現在〈広義の大谷石文化〉の範疇に入るものである。

(ア) 現在確認されている、宇都宮市内の採石場跡と呼称は以上の図3のとおりである。

- このほか、山王石（日枝神社に由来か？）・岩原石（田下町地域の隣接で産出したものか？）イナダ石（茨城県石切山脈と混同か？）を聞くが、採石地等が不明であり、あくまで私的な名称で、呼称としては確立し得えなかったものかも知れない。
- 熊堂石は、新里と徳次郎との境で、行政区域は国本に入り、徳次郎石工が採石した様だ。量は出なかったという。(池田定一氏H7.82)
- 徳次郎石は、高級品としての価値を維持するため（ひところ大谷石の2倍の価格）、徳次郎石工により大谷石と同質化を図らなかったのが、ブランドイメージが残った理由と考える。又、日光石材㈱において、スライス加工（仁良塚 国本小隣）をして、「日光石」のブラドで、主に京阪神地域に出荷した。価格は大谷の3倍位であったと見られる。
- 長岡石は、本誌、本会 北條園子の調査ノートにあるとおり、戦後、竈としての出荷は、大谷の業者により、大谷石として出荷されたようだ。

### (イ) 石の呼称の付け方について

概ね字名が付けられている傾向が見られる。(場合により、小字名がついていた。) 石工間においての、一応の了解事項であったのであろうか。呼称は、自治体の合併により、影響を受けているようだ。地域の最後の町村合併は、昭和30年代の頃であるが、それ以前について詳細は不明であるという。(元大谷石工 植松時四郎氏)

又、取引等で敢えて採石地と異なる名称が使用されたり、必ずしも厳格に使用されていなかったのは事実である。

## 4. 栄光ある徳次郎石最後の石工達

戦後の〈最後の採石〉徳次郎石工たちが残したもの( )内終焉の時期を記載する

○は中川が面談した記録あり

- |                 |                   |                        |
|-----------------|-------------------|------------------------|
| ○入江 幸一 (昭和15年頃) | ○池田 忠臣 (昭和20年頃)   | ○入江 仁 (昭和28年頃)         |
| ○入江 一巳 (昭和30年頃) | ○手塚 宏 (昭和30年頃)    | ○小堀 光男                 |
| ○池田 武夫 (平成2年)   | ○岡本 勝 (日光石材(株)専務) |                        |
| 池田覚一郎 谷田部兼吉     | 手塚 勇 入江兵四郎(門前)    | 入江徳一郎(中町)              |
| 館野 春吉 館野 半次     | 池田竹次郎(西根)         | ○田崎 芳男(仕上げ)〈金井 十一面観音像〉 |

\*最後の石工達の残した言葉(次号予定)

## 5. 徳次郎石工とフランク・ロイド・ライトの帝国ホテル、マックス・フィンデルの松が峰教会

～徳次郎石工の系譜を説く(大谷 酒屋店主、小沼和一郎氏より)～

### (ア) 徳次郎石と徳次郎宿

江戸時代、徳次郎石は主に農閑渡世としての形態が根底にありながらも、加えて、日光街道の徳次郎宿の流通社会にあって発展したのが、周辺他の石産地と異なる特徴的なところである。その技術的導入は、特に、南の江戸を經由して日本各地にからの知見が直接・間接にもたらされている。全国の凝灰岩石産地には相関性が認められる。一時代、徳次郎宿としての地の利を生かしての、進取性が早かったやに考えられ、さしたるタイムラグを生じることなく、野州の各産地に及んだようだ。要は、石組成すなわち石の特徴を、如何に利用するかによって、各地の独自の地域文化として発達した。徳次郎石の石屋根は、徳次郎石の特徴的素材として、福島、真岡の海潮寺等広範囲に分布している。

### (イ) 日光東照宮と徳次郎石

西根の『白い家』などの伝承によると、徳次郎石工の系譜を辿っていくと、次のようになる

(C)～(E)は、他の証言者もいて、ほぼ正しいものと考ええる。

\*『白い家』は、西根の土台から屋根まですべてが、徳次郎石でできていた家をいいます。

- (A) 東照宮の(下野改葬1617/寛政の大造替1634)には、全国から、徳島県池田町等からも、いわば『宮石工』ともいえる優秀な石工が集まった。この仕事の終焉に到り、徳次郎西根や今市等に居住するものが現れた。それが細工財を得意とする、徳次郎石工の源流とする伝承が一部西根にあるが、必ずしも実証的でない。これらは、徳次郎の彫刻屋台と同様に語られるところが、東照宮羨望の表れといえるのでなかろうか。彫刻屋台は、富田宿等の、製作者等多くは明確にされている。しかし、石工の場合は、何某の東照宮石工による影響の可能性までは否定しえない。基本的には、徳次郎石の文化はすべからく、市井の民による卓越した地域文化と考える。日光東照宮は、超職人的集団と想像され、半端な技術でないと考ええる。これらの事実関係を、日光東照宮に照回したが、江戸初期の資料はないという。
- (B) 明治に入り、西根のこの徳次郎石工達は、千人単位の石工集団で(池田武夫氏等)、2班に分かれていたとの証言もあるが、真偽の程は明らかでない。
- (C) 明治に入り、細工財を得意とした徳次郎の石工達は、特に西根辺りより大谷に居住して(瓦作付近という)で仕上げ石工として従事する。徳次郎に系譜を持つものにより、数多くの作品が世に出たという。
- (D) フランク ロイド ライトの帝国ホテル(1923)は、徳次郎に系譜のある石工によって、特に、玄関付近は製作されたものとの伝承がある。
- (E) マックス ヒンデルの松が峰教会(1932)は、石造工事は、マルタの安野半吾が請け負った。大谷石施行工事には、「徳次郎班」「大谷班」に分かれ、計約400人が従事した。「徳次郎班」は、徳次郎とりわけ西根に系譜をもつものが、上部の貼り石・彫刻を施し主導的であった。「大谷班」は、基礎部分を担った。時、世界大不況のさなかで、資金繰りに窮したが、逆に、石工の集合には、事欠かなかったとも伝わる。

## 6. 徳次郎石採石の始まりの歴史

徳次郎石の採石の起源は、諸説がかなりあり未だ定説をみていない。私見は、伝法寺起源説をとる。貞和5年(1349)創建の修行僧20名がいて五層の伽藍を有していたという、この大きな寺に石材を使わなかった理由がない。ましてその裏山こそが、徳次郎石最初の切り刃とされる「雁行山」のガンコ岩であるされることが、その理由とする所である。

しかしながら、その後、江戸時代初期まで徳次郎石の制作物件は現れない。さらに調べれば出てくるかは不明ではあるが。これに、当会、北條園子の調査を借りれば、途絶えていた戸祭石は、天保年間に坂本治平が開削した碑文があるとのことである。このようなことが、何らかの伝承により、石文化に復活する可能性が、あり得るものであろうか。

徳次郎石も、途も絶えていたものが、江戸初期の五街道の一つである日光街道の開削により、産業として復活したものであろうか。

## 7. 徳次郎石その採石の最後と実相院の石屋根



写真1. 大田原市作久山 実相院の山門

平野石であり、平野石は、概ね江戸時代に採石が終わったものとされている。入口の標識には引き続きこの表記がなされていると思われる。

平成7年の宇都宮市立富屋公民館の調べにおいて、平成2年の春、池田武夫氏をもって徳次郎石の歴史の終焉とした。その後、平成10年代に採石者の可能性が考えられる。大田原作久山の実相院の山門の石屋根は、大谷石か徳次郎石である。この建築は、平成18年ごろであるともいう。

なお、現存する最初の石瓦は、徳次郎上町館野旅籠の1804年(文化元年)のものである。

大田原市作久山「実相院」の山門の石瓦を施工した(有)日笠石材店によると、大谷石産業(株)が採石しており、大谷石のようだ。(徳次郎石の可能性もある)以前の石瓦は、矢板市の

## 8. 徳次郎宿の発展と徳次郎石

徳次郎宿は、五街道の一つ日光街道の往来によって、栄華をほこった。日光東照宮という人気スポットが、一般観光客をも招き入れた。しかしながら、封建社会下の助郷制にあって、宿場に疲弊経済を招いたが、同時に産業発展のみなもとでもあった。

○日光社参(18回)における、幕府強制による徳次郎宿助郷制度は、周辺をまきこみ疲弊経済をもたらした。ほぼ、見返りのない人馬(牛も含まれる)の提供は、すべからく持ち出しであるという。(徳次郎宿については、詳細な研究がなされていない。)那須烏山市の吉成登氏によれば、往路は、人馬牛と資材を運んだ一隊は、復路は助郷村に徳次郎石を運んだ、特に墓石を運んでいた様だ。大金界限は、徳次郎石の墓石が数多くみられる。縦の江戸への行路は、下野各地に及ぶ。鬼怒川を利用しての石井河畔からの江戸方面への輸送の可能性はあるが、詳細不明である。横は、助郷制が機能していた。



写真2. 須烏山市大金 吉成 登氏 宅地内  
徳次郎石墓石  
(天保10(1889)年、寛政、嘉永)

石屋根は、北に福島県に及び栃木県南（益子市、真岡市二宮長沼八幡宮）にまで派生する。明治以降、茅葺の屋根が持たず、石屋根に転化した、その後、トタン・瓦に変化している傾向がある。実相院の山門は見事であり、平成18年 那須塩原市の(株)日笠石材が石瓦を「手作業」で作成している。

大谷の石材業者によると、現在は、3Dのダイヤモンドカッターでの機械生産も可能とのことである。

## 9. 徳次郎石の基礎資料

### ①『富屋の建物』 富屋公民館 調査資料 平成8年（1997年）

宇都宮市立富屋公民館では、宇都宮市制100周年記念事業（平成8年度、1996）の記念地域イベントの一環として、郷土史の発掘事業として行ったものである。富屋地区の地域おこしの一環として、住民の手による郷土史の編纂がなされ、そのテーマの一つとして江戸時代から大正時代の富屋地区内の建物の調査がなされた。

スタッフ：富屋公民館 中川 博夫、1級建築士 豊田久三郎、1級建築士 柿沼 博

\* 本会、「徳次郎石研究会活動成果報告書2019（令和元）年度改訂版（令和3年3月25日）」の付録に一部資料を掲載してあります。

「富屋の建物」の解説につきましては、『明日に伝えたい富屋の郷土誌』（1996年度宇都宮市立富屋公民館及び宇都宮市政100周年記念富屋地区地域イベント実行委員会）P112豊田久三郎によりご覧下さい。

### ②中村幸蔵 『石造構法に関する研究』

宇都宮大学大学院工学研究科 建築工学専攻 建築材料研究室 昭和62年度（1986）修士論文

同研究は、徳次郎石を建築資材として大谷石、果ては福井県の笏谷石・滝ヶ原石と比較し、また、徳次郎石を中心とした石屋根についても、同じく福井県の丸岡城・瀧谷寺の比較がなされている。徳次郎石を研究するに、文化的にも多くの資料を残していただき敬意を表するものです。

## 参考文献等

- ・岡田善治 栃木の建築文化 カトリック松が峰教会 昭和61年（1986）（社団法人日本建築学会栃木支所）
- ・大谷石百選 NPO法人 大谷石研究会 2006年
- ・富屋の石造文化財年代別一覧 資料編 池田貞夫調査

## 付記事項

- ・那須烏山市大金 吉成 登氏（那須烏山市文化財審議員、文化財修復大工）には、直接ご指導をいただいた。
- ・坂本明氏（宇都宮市文化財解説ボランティア協議会）には、長岡石の資料提供をいただいた。
- ・本会員、宇都宮大学 相田吉昭 教授によれば、ニュージーランドの石の町「オワマル」（石灰岩のようだ）につき、本活動などの参考にとのご提案をいただいた。